

**世界子供白書 2003**

**THE STATE OF THE  
WORLD'S CHILDREN 2003**

## 謝辞

本白書は、以下の国々のユニセフ現地事務所およびユニセフ国内委員会を含む多くの人々および機関・組織の助力を得て作成されたものである（英語名のアルファベット順）：アフガニスタン、アルバニア、アンゴラ、アルゼンチン、オーストリア、アゼルバイジャン、バングラデシュ、ベルギー、ベニン、ブータン、ボリビア、ボツワナ、ブラジル、ブルンジ、カメルーン、カリブ海地域事務所、中央アフリカ、中央アジア諸国及びカザフスタン、中国、コロンビア、コスタリカ、コンゴ民主共和国、エジプト、エルサルバドル、エリトリア、エチオピア、ガボン、グルジア、ガーナ、グアテマラ、ガイアナ、ハイチ、ホンジュラス、インド、インドネシア、イラン、イラク、ジャマイカ、ヨルダン、ケニア、レソト、マダガスカル、マラウイ、モルディブ、モーリシャス、メキシコ、モンゴル、モザンビーク、ネパール、ナイジェリア、パレスチナ、パキスタン、ペルー、フィリピン、モルドバ、ロシア、サントメプリンシペ、セネガル、ソマリア、南アフリカ、スリランカ、スーダン、シリア、タイ、旧ユーゴスラビア・マケドニア、東ティモール、トルコ、ウクライナ、タンザニア、ウルグアイ、ベネズエラ、ユーゴスラビア、ザンビア、ジンバブエ。各ユニセフ地域事務所、イノチェンティ研究センターおよびユニセフ駐日事務所からも意見が寄せられた。

子どもたちが撮影した写真は、ドイツ技術協力庁（GTZ）（[www.imagine.gtz.de](http://www.imagine.gtz.de)）、'Through the Eyes of Children'/The Rwanda Project（子どもたちの目を通して／ルワンダ・プロジェクト）、セーブ・ザ・チルドレン英国、カサ・グランデ財団、ケメティック研究所、フォトボイス（[www.photovoice.org](http://www.photovoice.org)）の提供によるものである。子どもたちの絵は、アーティストのイク・ジュン・カンによる展示会「仰天した世界」と、オマーンおよび東ティモールの各ユニセフ現地事務所から提供された。

# 世界子供白書 2003

## THE STATE OF THE WORLD'S CHILDREN 2003

ユニセフ(国連児童基金)事務局長  
キャロル・ベラミー

子どもたちの写真と絵とともに

# 目次

まえがき コフィ・A・アナン国連事務総長

## 章 1 2 3 4

子どもたちの声が聴かれなければならない

なぜ、いま参加なのか

参加する人生

積極的な学習

1 ページ

9 ページ

19 ページ

27 ページ



パネル	1. 子どもたちが見たもの、見せてくれるもの	6
	2. 子ども参加：神話と現実	16
	3. 子どもの参加の「権利」	24
	4. 女の子は大きく勝つ！	32
	5. 国づくり	40
	6. 子どもたちにきいてみた	50
	7. 子どもとメディア	58
	8. 私たちは世界の子どもです	66

本文中の図表	1. 子ども参加	3
	2. 民主化の度合いを高める世界	10
	3. G7 諸国における投票率の低下	12

注	70
---	----

# 5

参加と保護の先頭に  
立つ子ども

35ページ



# 6

子どもたちの声に耳  
を傾ける

43ページ



# 7

参加の空間

53ページ



# 8

国連子ども特別総会  
にて

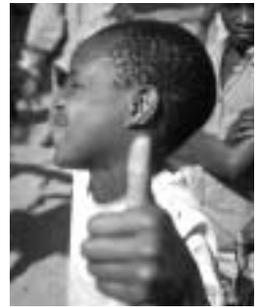
61ページ



# 9

前進

69ページ



## マップ

.....	73
1. 子どもたちはどう考えているか .....	74
2. 子どもたちは何を望んでいるか（保健、教育、健全な環境） .....	76
3. 子どもたちは何を望んでいるか（保護） .....	78
マップに関する一般的留意事項 .....	80

## 表

.....	81
1. 基本統計 .....	84
2. 栄養指標 .....	88
3. 保健指標 .....	92
4. 教育指標 .....	96
5. 人口統計指標 .....	100
6. 経済指標 .....	104
7. 女性指標 .....	108
8. HIV／エイズとマラリア .....	112
9. 前進の速度 .....	116

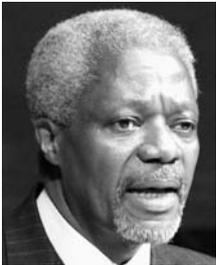
## 用語解説

.....	120
-------	-----

「子どもたちは、  
自分たちのアイディア、希望、  
夢を携えてきてくれた」

コフィ・A・アナシ

# まえがき



今年の『世界子供白書』の焦点に選ばれたテーマ——子ども参加——は、おとなたちに対し、子どもや若者に影響を及ぼす決定を行うときには彼らの意見を引き出し、検討する義務があることを思い出してもらうためのものである。

今回の白書のテーマは、2002年5月に開かれた歴史的な「国連子ども特別総会」の精神そのものにほかならない。子どもの問題について話し合うためだけに国連総会が開かれたのは、これが初めてであった。そして、政府や非政府組織の代表団の正式メンバーにたくさん子どもたちが含まれていたのも、これが初めてであった。

子どもたちの存在は国際連合の雰囲気を一変させた。子どもたちは、いつもなら慎重で外交的な私たちの議論に、情熱を、疑問を、恐れを、挑戦を、熱意を、そして楽観主義を持ちこんだ。子どもたちは、自分たちのアイデア、希望、夢を携えてきてくれた。子どもの権利条約の価値に生命を吹きこんでくれた。そして、子どもたちだけが知り得ることを教えてくれた。21世紀に子どもであるということはどういうことなのか——HIV／エイズが破滅的な割合で増え続けている時代に、かつてないほどの富が極端な貧困と共存している時代に、子どもの権利が、ほぼ全世界で承認されているながら世界中で組織的・日常的に侵害されている時代に、子どもとして経験していることを教えてくれたのである。

各国政府は、特別総会の成果文書で、子どものために、そして子どもとともに世界を変えていくことへの——21世紀に子どもにふさわしい世界を築き上げていくことへの決意を宣言した。そのことを達成するためには、子どもと若者の声にしっかり耳を傾けるという約束を各国政府が履行すること、よりよい未来を築くための行動に子どもたちが全面的に参加できるようにすることが、どうしても欠かせない。

A handwritten signature in black ink, which appears to read 'K. Annan'.

コフィ・A・アナン  
国連事務総長



# 1

## 子どもたちの声が 聴かれなければならない

「おとなたちは勘違いしています。子どもはいつになったら、積極的な貢献と参加ができるだけの力が身についたと見なされるのでしょうか。参加の機会を与えてもらわなければ、子どもは力を身につけることができません。早い段階でチャンスをくれて、私たちがどんなふうに羽ばたくのを見てください」

カイルル・アズリ、17歳（国連子ども特別総会マレーシア政府代表団メンバー）

中国のミンギユ・リアオ（10歳）は、2002年9月にヨハネスブルグ（南アフリカ）で開かれた「持続可能な開発に関する世界サミット」で演説した。彼女は、その3ヵ月前に80を超える国々から400人以上の子どもたちが参加して開かれた、国連環境計画の国際子ども会議で選ばれた3人の代表のひとりである。「みんな、言いたいことが山ほどありました」と、彼女は報告した。「けれども、代表の子どもたち全員がいちばん気にしていたのは、指導者のほとんどが話を聴いてくれないということでした」

ミンギユ・リアオのほかに、演壇には4人の子どもたちが立っていた。カナダのジャスティン・フリーゼン、エクアドルのアナリス・ベルガーラ、そしてホスト国である南アフリカのジュリアス・ヌドロベーナとティイセラニ・マンガニである。子どもたちはこう突きつけた。

「広々とした空間のなかで、この2人の男の子たちの目には何が映っているのだろうか。彼らが表明したいと思っていることを、私たちはどうやって理解できるのだろうか。ひょっとしたらそれは、よりよい未来になってほしいという熱い思いなのかもしれない」（ヌグイエン・チャウ・トユイ・トラン）

Nguyen Chau Thuy Trang/Viet Nam/Street Vision/PhotoVoice

「私たちは無理なことは言っていません！ みなさんは、このサミットは行動を起こすためのものだと仰いました！ 拍手や、『よくできた』とか『すばらしいスピーチだった』という言葉だけならいりません。私たちが必要なのは**行動**なんです」

この若き活動家たちが、冷や水を浴びせられることはなかった。彼らは、国連子ども特別総会（2002年5月）で活躍した他の子どもたちと同じように、未来へのビジョンと情熱で代表団たちの心を動かしたのである。「子どもたちのことを考えてください」と、彼らは訴えた。「子どもたちのために、どんな世界を望むのですか？」

この子どもたちは最終的に、サミットの最終宣言をめぐっておとなが交渉するといういつもの手続では不可能だった成果を獲得した。世界の指導者たちは、おたがいに対してだけではなく**子どもたち**に対

**しても**責任を負っていることを認め、世界を貧困、環境悪化、持続不可能な開発パターンから解放すると誓ったのである<sup>1)</sup>。

インド南部の農村では、NGOである「ミラダ」が、社会正義に関わる2つの問題をめぐって子どもたちのコミュニティ・グループを組織した。ひとつは、親の債務を肩代わりするために子どもが無理やり働かされ、有害なことの多い労働条件のなかで長期間耐え忍ばなければならないという、債務労働の問題である。もうひとつは、11歳という幼い少女が無理やり結婚させられ、子どもの最善の利益を損なうような妻としての役割を強いられる、児童婚の問題である。

さまざまなコミュニティで結成されたいくつかの子どもクラブは、協力しあい、親、その他のおとなの地域住民、地元公的機関と互いを尊重し合った対話を開始した。対話の目標は2つである。何人かの地主や工場経営者を説得して、子どもを奴隷状態から解放させること。そして、結婚させられようとしている少女たちの親を説得して、幼い娘を嫁にやるという決断を考え直してもらうこと。どちらの目標もうまくいった。

これに加えて、ミラダ・プロジェクトでは教育問題をめぐる「支えあいのコミュニティ」も創り出した。コミュニティの指導者や地元公的機関、親や高齢者、若者や子どもたちが協力しあい、子どもたちや、学校に行っていない子どもの親に働きかけることによって、生徒の常習的欠席や中途退学の問題に目を配っていかうというものである。

学校議会でも、子どもたちは学校やコミュニティ内外の問題にとりくんでいる。生徒たちは「野党」も選出しており、その責任は、執行部の生徒の計画、決意表明、約束、行動を監視することである。リーダーとしての立場を実地に経験することにより、子どもたちは、自分を選んでくれた人々に対して説明責任・応答責任を負っていること、選挙で選ばれた立場に立つには決意が必要であり、約束と責任を果

たさなければならないことを、学んでいった<sup>2)</sup>。

以上は、さまざまな状況やさまざまな文化から集められた多くの実例の中から、2つの例を紹介したにすぎない。これらの実例は、子どもや若者が貢献の機会を与えられれば、他の方法では達成できなかったかもしれない変化をもたらすことができるということを示しているのである。

## おとなの力を伸ばしていく

世代によって、立ち向かわなければならない課題は変わっていく。子どもたちに、そして子どもたちの意見に耳を傾けることは、私たちの世代が直面している課題のひとつである。今年の『世界子供白書』は、こうした点に関するおとなの責任に焦点を当てている。すなわち、子どもたちに意見を求め、それを真剣に考慮する責任と、子どもが世界に正統かつ意味のある形で参加する力を伸ばせるよう、その手助けをする責任である。

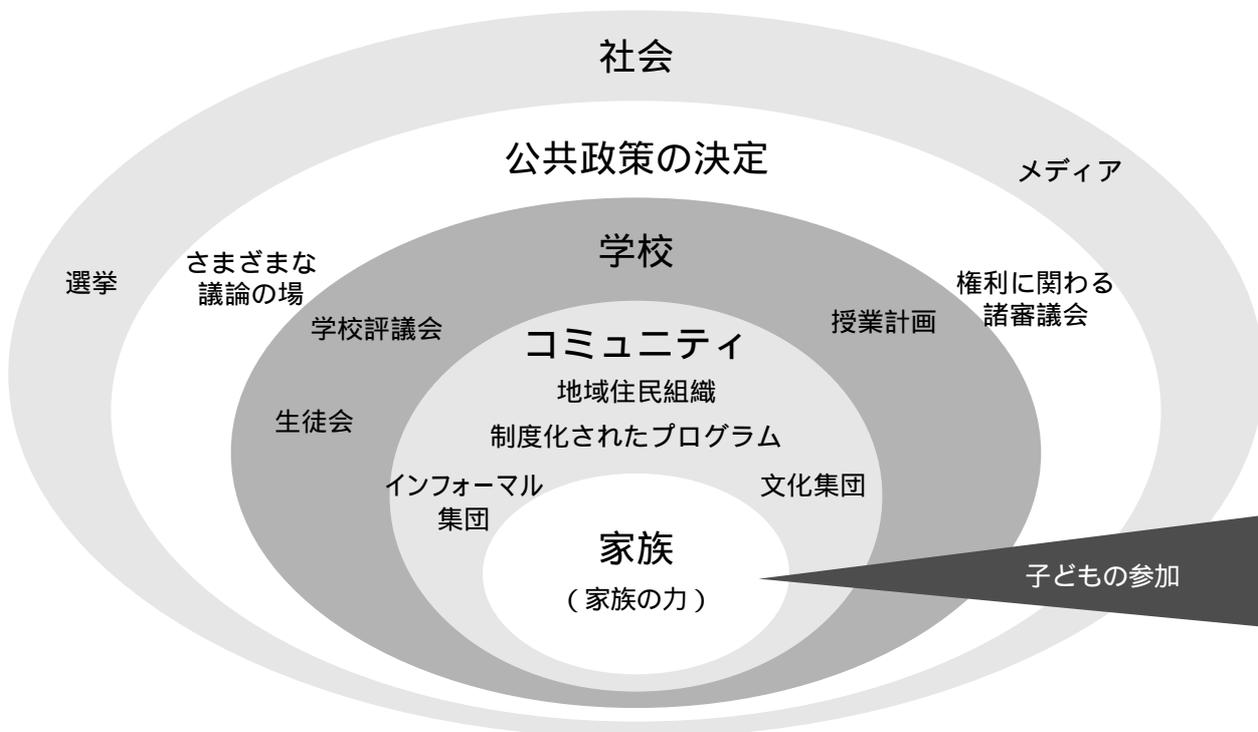
そのためには、おとな自身が新しい力を伸ばしていかななければならない。私たちは、子どもや若者の意見を効果的に引き出す方法、彼らの多様な声やさまざまな自己表現のしかたを認識する方法、そして彼らのメッセージを、それが言葉によるものであるかそうでないかを問わず、解釈する方法を学ばなければならない。私たちはさらに、子どもと若者の意見に耳が傾けられ、正當に考慮される機会と、時間と、安心できる空間を確保しなければならない。そして、子どもや若者のメッセージと意見に適切な形で応える能力を伸ばしていかななければならない。

今年の白書でユニセフが目指すのは以下のことである。

1b若者が家庭、学校、コミュニティおよび国の中で生活に積極的に参加することの重要性、根拠、価値および実行可能性に対し、一般の人々の関心を促すこと。

図1 子ども参加

子どもが成長発達するにつれ、その参加の機会は私的な空間から公的な空間へ、影響力の地域的な行使から世界的な行使へと拡大していく。



サルパドル（ブラジル・バイア州）で開かれたユニセフ「グローバル・ライフスキル・ワークショップ」（2002年6月）で発表された、R・ニミ作成によるパワーポイントの図を修正。

- 1b 各国、市民社会組織および民間セクターに対し、子どもが自分たちに影響を与える諸決定に正統な形で関与することを促進するよう、奨励すること。
- 1b 子どもが自分たちに影響を与える事柄に貢献する機会を得たとき、子どもたち、家庭およびコミュニティの生活がどのように変わってきたかに関する事例を提示すること。
- 1b 「子どもにふさわしい世界」とミレニアム開発目標（MDG）の目標を達成するための、子どもと若者を巻きこんだ行動を促すこと。MDGに関する活動が進められていくなかで、子どもと若者の生活を向上させることは、必然的にあらゆる努力の核心に置かれることになろう。子どもと若者の参加は、すべての成功例の中心的要素となるはずである。

### 参加を定義する

参加は、幅広い定義と多義的な解釈に彩られた主題である（パネル2「子ども参加：神話と現実」16ページ参照）。実のところ、子どもたちは今までも生活の中で参加してきている。家庭で、学校で、仕事先で、コミュニティで、戦争で、参加を実践しているのである。ときには自発的・英雄的に、ときには強制的・搾取的に。どんな文化でも、歴史を超えて語り継がれる英雄たちの中には子どもの姿があり、おとぎ話の中でも世界を変えた子どもたちについて語られている。

この間生じてきたのは、社会的に構築された子ども期という概念の、社会と価値観の変化に伴う変遷である。集団としての子どもたちは徐々に、権利を持った人間として、そして社会的行動主体として、

独自の地位を占めるようになってきている。けれども、世界の圧倒的多数の子どもたちはいまだに社会の周縁に追いやられているのが現実なので、子ども参加を確保し、子どもを搾取から守るための構造的な努力が必要である。

参加という言葉はしばしば次のように定義される。「ある人の生活や、ある人が暮らしているコミュニティの生活に影響を及ぼす決定を共有するプロセス。それは、民主主義を築いていくための手段であり、民主主義の度合いを測るための基準である」<sup>3)</sup>

参加は多面的現象として認識されており、幅広い範囲の活動を含みうる。活動の形態とスタイルは、子どもの年齢によって、以下のようにさまざまである。情報を求め、学びたいという欲求を（たとえ非常に幼い年齢であっても）表明し、意見を形成し、考え方を明らかにすること。さまざまな活動やプロセスに参加すること。意思決定の際に情報を提供され、意見を聞かれること。自分たち自身でさまざまなアイデア、プロセス、提案、プロジェクトを実行していくこと。状況を分析し、選択を行なうこと。他人を尊重し、自らも尊厳をもって取り扱われるようにすること<sup>4)</sup>。

子どもと若者にとっての目標は、単にもっと参加できるようにするというのではなく、意味のある参加のための機会を最大限に拡大するところにある。しかし注意しなければならないのは、子ども参加という考え方がどんなに魅力的に映っても、それは一般的に思われているように「ただで手に入るお徳用品」ではないということである。また、子ども参加を進めることで、どんなプロジェクトもより合理的になるというわけでもない。子ども参加には、直接的なコストも、他の道を選ぶことによって得られたはずの利点を失うというコストも、ともにかかってくるのである。

にも関わらず、参加を促進しないことが社会にもたらす中期的・長期的コストを考えると、やはり参加のスキルが学習・実践されなければならない。若

者たちが、自己表現も、交渉で違いを解決することも、建設的な対話に携わることも、自分自身、家庭、コミュニティおよび社会に対する責任を担うことも知らないままおとなになっていったとき、その世界はどうなるだろうか。

しかし、もっとも重要な点は、子ども参加が、子どもの権利条約を指針として行動するすべての人々の責任であり、義務であるということである。参加とは、条約の文脈では、自分たちに影響を及ぼす問題についての意見をまわりの人々に知らせるよう子どもたちを促し、それができるようにするということを意味する。

実践的場面では、参加とは、おとなが子どもたちに耳を傾けるということである。おとなは、複合的で多種多様なコミュニケーション手段を尽くしながら、子どもたちの自己表現の自由を確保し、また子どもに影響を及ぼす決定をするときに子どもたちの意見を考慮に入れなければならない。

子どもに影響を与える問題について、子どもと話し合わなければならないという原則は、しばしば抵抗にあう。抵抗する人々は、そうなれば家庭や社会におけるおとなの権威が損なわれてしまうと考えてるのである。けれども子どもの意見に耳を傾けるというのは、単純に彼らの意見を支持することではない。むしろ、子どもたちを対話と交流に巻き込むことで、子どもたちは自分たちのまわりの世界に建設的なかたちで影響を及ぼす方法を学べるようになるのである。参加を通じて社会的なギブ・アンド・テイクを経験することで、子どもたちは、積極的、寛容かつ民主的な市民として成長していき、徐々に大きな責任を担っていくよう促されるのである。

## 正統な参加

子ども参加が、関わり方、とりくみ方、力の注ぎ方の面でさまざまな形態をとることに注意が必要である。そして、すべての子ども参加が積極的で、社会に役立ち、目的意識があり、意味があり、

あるいは建設的であるというわけでもない。子ども参加は、たとえ善意のおとなによって構想されたときでも、本当の意味での参加ではなくなってしまうことがあまりにも多い。子どもが操られたり、単なる飾りあるいは見せかけの参加者として扱われたりすれば、そうになってしまう(「参加のはしご」参照<sup>5)</sup>)。また子ども参加は、あまりにも容易に「おとな中心」のものになったり、気が進まない子どもに押しつけられたり、子どもの年齢や能力にふさわしくない方法で構想されたりしてしまうものである。最悪の現れ方をした場合、子ども参加そのものが抑圧、搾取、あるいは虐待になりうる。

正統かつ意味のある子ども参加は、そうした例とは対照的に、子ども・若者自身から、彼ら自身が望む条件で、彼ら自身の現実の中で、そして彼ら自身の展望、夢、希望、関心事を追求することを通じて、開始されなければならない。子どもたちが適切な私たちで、また自らの尊厳と自尊心を高めるような方法で参加できるようにするためには、情報と、支援と、好ましい条件が必要である。

適当な空間が用意されれば、正統な参加は、人々——子どもたち——を他者との兼ね合いで、そして他者および世界との関係のなかで大切にすることに

つながっていく。

子どもが世界に効果的に参加できるかどうかは、以下のようないくつかの条件にかかっている。子どもの能力の発達がどの段階にあるか。親をはじめとするおとなが、子どもたちと対話し、子どもたちから学ぶことに対して開かれた姿勢を持っているかどうか。そして、そのような対話を可能にするだけの安全な空間が家庭に、コミュニティに、社会にあるかどうか。また、効果的な子ども参加ができるかどうかは具体的な社会文化的・経済的・政治的状況次第でもある。

そして、正統かつ意味のある子ども参加のためには、何よりもおとなの考え方と振る舞い方を根本的に転換しなければならない。子どもたちと、子どもたちが持っている力を排除するのではなく、それを包みこむアプローチへ。おとなだけが世界のあり方を決めるのではなく、子どもたちが住みたいと願う世界を築きあげることに子どもたち自身が貢献する世界へ。そのような転換が必要なのである。

**「子どもたちが何も変えられないと思っているなら、大間違いです。子どもたち以外に、世界の悪いことを全部説明できる人たちがいるのでしょうか。子どもたちの声を聴くべきだし、子どもたちの考え方や意見に耳を傾けるべきです。そうすれば世界の指導者たちも、自分たちが世界にどんな悪いことをしているかを考えて、世界の子どもたちみんなを助けようとするかもしれません」**

ウルシュカ・コロセッチ(16歳) スロベニア

「ボイス・オブ・ザ・ユース」(若者の声)のウェブサイトより

2002年3月24日

# パネル 1

今年の『世界子供白書』で用いられている写真や絵は、ほとんどが子どもたちによって撮影・制作されたものである。それは、子どもたちの「声」に子どもたちが一番安心して利用できるあらゆる声に 耳を傾けることによって子どもたちの生活について学んでいこうという、継続的なコミットメントの一環として掲載されている。

## 子どもたちが見たもの、 見せてくれるもの

子どもたちは、世界の見方がおとなとは異なるというだけでなく、自分が見て感じたことを共有する力も年齢とともに変わっていく。言葉や文章は、おとなや年長の子ども（要するに何年も練習を積んできた人々）にとってはわりに簡単に利用できるかもしれないが、もっと年少の子どもたちにとっては、カメラやクレヨンが一番表現しやすい手段であることが多い。17歳のヌグイエン・チャウ・トユイ・トラン（ベトナム）が説明するように、「言葉では言えないこともあるし、写真のほうが表現しやすい気持ちもある」<sup>(1)</sup>のである。

たとえば、1994年の大虐殺の過程で100万人近くが殺されたルワンダでは、右写真の13人の子どもたち（最後列左からフレデリック、ガソーレ、バクンジ、デュシンジマナ、ウマホロ、イマニザバヨ、インガビレ、エリザベス、トゥワギラ、ジャクリン、ウムホザ、ガディ、ムーサ）が、ワークショップを通じ、自分たちの日常生活を記録するやり方について学んだ。このワークショップは、「子どもたちの目を通して」／ルワンダ・プロジェクトの一環として行われたものである。『白書』表紙、右ページ、68ページに掲載された写真などはすべて、子どもたちが見たルワンダという国について子どもたち自身が語ってくれる、日々増え続ける作品集の一部なのである。

### 絵と夢

絵を描くことは、幼い子どもたちに「話をする」機会を与えるものである。子どもたちは、世界中のさまざまなプログラムのなかで、世界がどのように見えているのか教えてほしいと頼まれている。国連子ども特別総会では、125ヵ国以上から集められた3万4,000人近くの子どもたちの声が、絵を通じて受けとめられた。国連事務局の見学者入り口に入ってすぐのところ、すぐに目につくような形で展示されたこ

れらの絵は、「仰天した世界」と題するプロジェクトを通じて募集されたものである。韓国政府、ユニセフ、韓国財団、ユニセフ韓国委員会の後援で実施されたこのプロジェクトは、子どもたちに、絵を通じて自分たちの夢や意見を表現するよう呼びかけた（18ページの絵参照）。

### 写真と現実

写真について学ぶ過程で、若者たちは自信と自尊心を育成し、深めていくことができる。仕事に役立つスキルと、自分たちの生活についての新しい見方を獲得していくからであ





る。「写真を撮るとき、僕は幸せになりたいと思う。……街を通るとき、いつかは僕の国もこんなふうになってほしいと思う」と、難民としてロンドンに住んでいるオネ スムス（15歳）は語っている。<sup>注2)</sup>

世界中のさまざまなプロジェクトで、写真を通して子どもや若者の声に耳が傾けられている。たとえば、45カ国の500人以上の子ども・若者たちが、「イマジン——きみの写真が目を見開かせてくれる」というプロジェクトの一環として、自分たちの生活の姿をとらえた。これは、ドイツ技術協力庁（GTZ）と、ベルリン在住のジャーナリスト、フィリップ・アプレッシュが共同で実施した青年写真プロジェクトである。「イマジン」は、言葉の壁を越えて、子どもや青少年たちを、そして世代と文化を結ぶかけ橋となっている。「イマジン」はまた、世界を結ぶインターネットのチャット・ルーム、カタログ、絵葉書、オンライン展示を通じ、写真や自分たちの問題について子どもたちがコミュニケーションする機会も生み出している（17・26・41・42・52ページの写真参照）。

同様に、ロンドンに本部を置く「フォトボイス」は、難民の子どもや路上で生活している子どもなど、社会のなかで周縁に追いやられたグループに声を与えている団体である。この団体は、このような子どもたちの生活について意識啓発を進める一方で、新たに見出したスキルを通じて子どもたちが収入を得られるよう援助している（第1章扉左の写真参照）。米国では、アフリカ系アメリカ人が住民の多数を占めるマウンド・バユーや、ミシシッピ・デルタ周辺地域において、子どもたちが生産的な市民になれるよう手助けをするというケメティック研究所の活動の中で、写真が活用されている。そのため同研究所は、若者が自分の才能を模索するよう、刺激と指針と動機を提供するような環境づくりを進めている

（25・54ページの写真参照）。また、国連、ユニセフ、いくつかのNGOの合同イニシアチブである「知る権利」は、健康的な生活を送るために青少年が十分な情報を得た上で物事を決め、前向きな行動を起こせるようにするためのものである。そこでは10代の青少年が、自分たちの生活のなかで重要なことを仲間やおとなに伝えるために写真を撮っている。これらの写真は、HIV／エイズについての情報を青少年に提供するために13カ国で試験適用されるグローバル・コミュニケーション戦略の中で、活用される予定である（20・51ページの写真参照）。

## これからも

パレスチナの子どもたちは、セーブ・ザ・チルドレン英国の「アイ・トゥ・アイ」（目から目へ）プロジェクトを通じて、創造的に自己表現し、自分たちの作品を世界中の仲間と共有する得がたい機会を手に入れている（8ページの写真参照）。子どもたちの写真はオンラインで共有されている。その写真に触発されて、英国に住んでいるキム（14歳）とダベントリー（15歳）はオンライン掲示板に次のように書きこんだ。「同じ年齢なのに僕たちとはぜんぜん違う状況にいる人たちの写真を見て、すごく感動したということを言いたい。……それでも君たちは幸せで、前向きで楽観的な生き方ができるんだね。僕たちがどれだけラッキーかって、よくわかった。スポーツ、がんばってね。……サッカー……サッカー——最高！ これからも笑顔を忘れずに」

1) *On the Record for Children* (10 May 2002) 1ページ写真参照。

2) フォトボイスの展示「さえぎるものがない世界：境界なしで生きる」